

# 変形について

研究協力者 高 島 敬 忠  
(日本大学医学部小児科)

## はじめに

先天奇形の Monitoring に際し、その奇形の有無の診断の上で過剰診断しやすい変形につき、検討を加えてみたので、研究報告とする。

この変形 Deformation は奇形とは似て非なるもので、出生直後の児に認められるものであり、Congenital Postural Deformity とも称されている。

まず、Deformation の概念を述べると、諸器官が正常に出来上ってから、即ち胎生後期に子宮内における強制姿勢により胎児に生じた外表の形態異常であり、出生直後の児に認められる。従って、奇形と一見みちがえることもあるが、全く別個のものであり、その予後は良好であり、数ヶ月の放置で自然に正常に復する。すなわち、出産を契機に子宮という鑄型内での強制姿勢や異常な圧力から解放されるので、自然に回復してくる。図1はその成因を図示した。

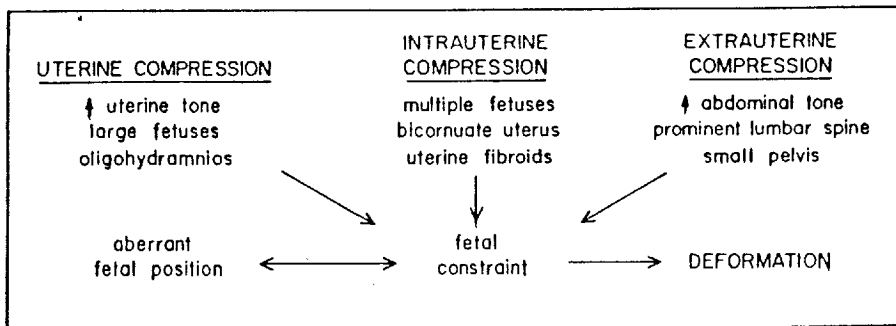


図1 変形の成因ならびに発生機序

そこで我々は実際に新生児を対象として、Deformation を観察してみた。

## 研究方法並びに対象

文献に基き、チェック・リスト(表1)を作成し、同一観察者が記入した。対象は日本大学附属板橋病院で出産した生後1週までの新生児242例について観察した。

## 成 績

242人の新生児中17例、7%に変形が認められ、それらの所見は内反足、外反足、足趾の重

表 1 Congenital postural deformities チェックリスト

氏名	病歴番号
生年月日	性別
昭和年月日	出生体重
在胎週数	週日
性別	♂
♀	♀
身長	cm
胸囲	cm
頭囲	cm
妊娠中合併症	: 無・有〔疾患名: 〕
妊娠中使用薬剤	: 無・有〔薬剤名: 〕
妊娠中放射線被爆	: 無・有〔程度: 〕
羊水過多症	: 無・有〔約 ml〕
羊水過少症	: 無・有〔約 ml〕
胎位・胎向等	: 頭位・臀位・横位・その他〔 〕・単胎・双胎・その他〔 〕
子宮の奇形	: 無・有〔 〕
胎動	: 強い・普通・弱い
分娩用式	: 正常・鉗子・吸引・帝切
1. 頭部	: 正常・小頭・巨大頭蓋・短頭・斜頭・尖頭・長頭・頭血腫
2. 額	: 正常・突出・幅広い額
3. 顔貌	: 正常・Potter 様顔貌・顔面非対称
4. 眼	: 正常・眼球突出・内眼角離開・内眼角贅皮・小眼球・眼瞼下垂
5. 鼻	: 正常・鞍鼻・小鼻翼・鼻根平坦・鼻根隆起
6. 耳	: 正常・耳介〔大・中・小〕・耳介変形〔耳輪形成不全・内反・伸展耳輪・その他〕
7. 顎	: 正常・小顎・前突・後退・下顎非対称
8. 口唇	: 正常・唇裂
9. 口蓋	: 正常・口蓋裂・高口蓋・狭小口蓋
10. 舌	: 正常・舌変形
11. 頸	: 正常・胸鎖乳突筋拘縮・腫瘤・短頸・斜頸
12. 軀幹	: 正常・鳩胸・漏斗胸・胸部非対称・脊柱彎曲〔側彎・亀背・その他〕
13. 上肢	: 正常・肩関節転位・外反肘・内反肘・腕手の圧迫・内反手・橈骨神経麻痺・猿線〔右・左〕
14. 下肢	: 正常・股関節脱臼・反張膝・外反足・内反足・下肢彎曲・関節拘縮〔部位: 〕・疝骨・閉鎖神経麻痺
15. 全身	: 先天性多発性関節拘縮・Potter 症候群・その他

聾, 耳介変形, 顔面非対称, 股関節異常等であり, 1 個体に 2 つの変形が合併している例もみられた。

観察例が少ないが, 正常新生児の 7% にも変形の概念に相当する異常がみられた。この結果はイギリスの Peter Dunn らの 2% という頻度より相当高いものになる。

また, ごく最近 Metropolitan Atlanta Congenital Defects Program (MACDP) の registration の結果が AM. J. Human Genetics (1986) にみられたが, その内容をみると, 内反足が全奇形 7,490 に対して 1,309 と最も多く全体の 1/6 を占めていた。これは想像するに變形が相当混入している可能性が高いと思われる。變形を除外するには生後数カ月後に再度同一個体を観察し, その変化をみる必要性があろう。その時点で自然に修復されていれば變形と考えられる。内反足に限って, 新生児期の鑑別を経験から述べると, 足関節部に可動性があり, 簡単に正常の位置に復することが出来るのは變形と考えられる。従って, 縷々述べてきたが, 先天奇形のモニタリングのマーカーとしては新生児期においては變形によって生じやすい, 内反足, 指の重疊, 頭蓋や耳介の變形など不適當と思われる。

さて、ここで、今迄に経験した変形の概念に相当するいくつかの例を示すことにする。

写真1は出生直後より左側頭部から頭頂部にかけて、頭蓋骨に大きな陥凹を認める。これは頭蓋骨に著明な変形をきたした、いわゆる Congenital moulding depressions of skull の典型例と考えられる。出生後3カ月時にはその間なら治療を試みなかったが、ほぼ正常に復しており、現時点までは児の精神運動発達も特に異常を認めていない。このような症例は頭蓋骨の眞の骨折ではなく、その原因は子宮内において、母体の恥骨結合、仙骨岬角や第5腰椎による数カ月に亘る圧迫と考えられる。その圧迫が出産を機会に解除されるため、頭蓋骨の陥没は数カ月の経過で自然に挙上されることが多い。

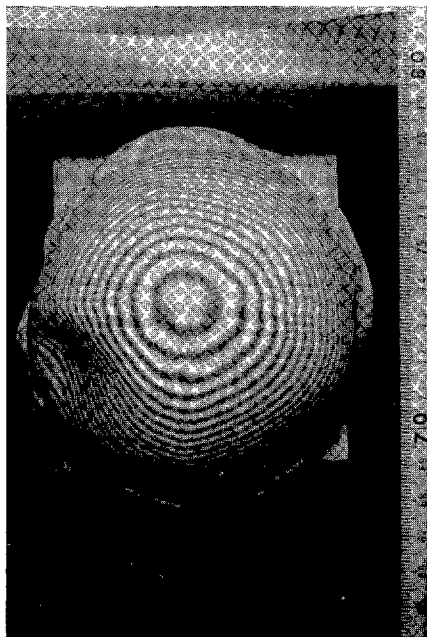


写真1 頭蓋骨の大きな陥凹(左側頭部)

次の症例は写真23の如く骨盤位にて、長頭傾向の強い所見がみられるが、下肢は挙上している。出生後の児の状態は大腿屈筋群の短縮のため下肢が十分に伸展できず、腹臥位にすると写真4の如く、臀上り現象がみられた。この症例も3カ月程の経過で新生児期挙上していた下肢もベットにつくようになり、何んの治療することなく正常に復した。

出生時において、変形という概念に属するものを挙げてみると次のようである。

頭部：頭蓋変形並びに頭蓋の陥凹

顔面：Potter 様顔貌，鼻や口腔の変形，下顎後退，顔面および顎非対称，耳介の変形

頸部：斜頸

体幹：胸郭変形，側彎，多発性関節拘縮

上肢・下肢：肩関節脱臼，内反手，長管骨の彎曲，股関節脱臼，内反足等

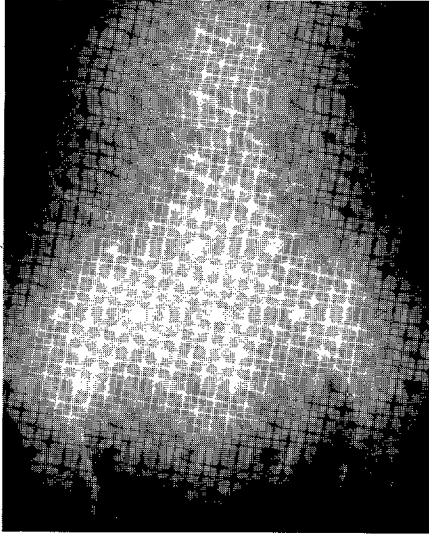


写真 2 胎児は骨盤位で下肢を拳上伸展している

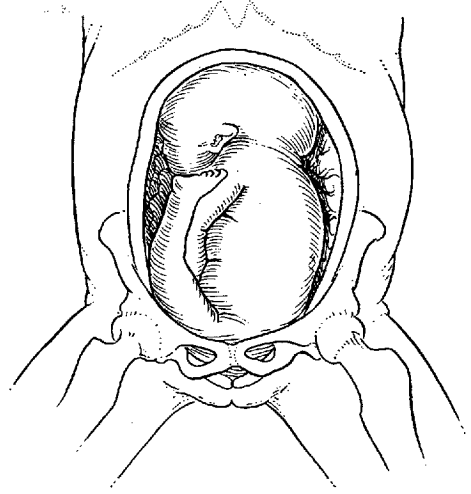


写真 3 写真 2 より想像される胎児の姿勢

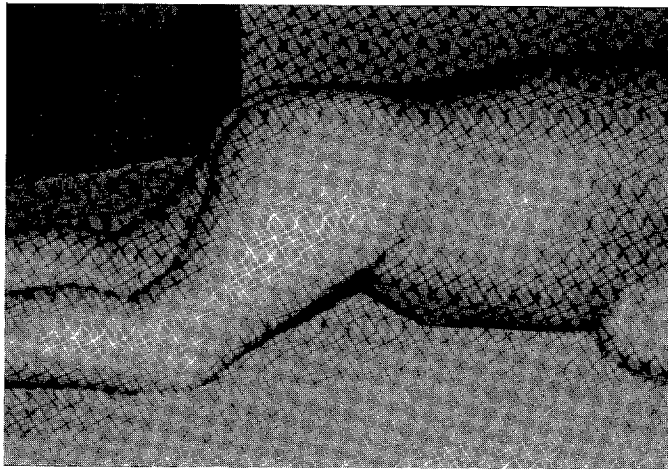


写真 4 大腿屈筋群の短縮のため臀上り現象がみられる

このように多数の変形の出現が認められているが、子宮という鑄型の形状によって種々の変異が出現することは容易に想像されよう。

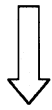
#### 一 新生児期の奇形症候群 一

奇形症候群を新生児期に診断することは大変難しいことであると思っている。変形等の種々の修飾を受けて生れてくる新生児では尚更のことである。Down 症候群一つにしても新生児期は同様である。ましてや、モザイク型 Down 症候群などになると専門家さえ染色体分析の結果を待たないと診断を下せないこともある。先日 5 カ月の Cornelia De Lange 症候群を経験したが、生後 2 カ月頃までは発育不全のみで外表奇形もなく、特徴ある眉毛もみられず経過をフォローしていた児が生後 5 カ月で再診した時は比較的典型的顔貌になっていた。このように新生児期の奇

形症候群の診断には大変に困難を感じている。ましてや、モニタリングのレベルになると外表奇形の有無で判断しやすい Pierre-Robin 症候群, Poland 症候群や合指症を主症状にする奇形症候群などをマーカーとするのが適当と考える。モニタリングの本来の意味がなくなるかも知れないが、新生児期にモニタリングし異常のあった同一個体を生後1～3歳で再 check 出来るような機構があれば、その精度に関してはより正確なものとなるであろう。

## 結 論

- 1) 奇形と似て非なる変形は正常新生児にも6%前後に認められるので、モニタリング関係者には変形という概念を熟知して欲しい。
- 2) 我国のマーカーには内反足が入っていないが、内反足には変形によると思われるものが多数含まれるので、マーカーに取込まなかったのは賢明な処置であった。
- 3) 奇形症候群の診断は新生児期は仲々困難である。そこで、大奇形が必発の症候群例えば Poland 症候群などはマーカーとして適当と考える。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

先天奇形の Monitoring に際し, その奇形の有無の診断の上で過剰診断しやすい変形につき, 検討を加えてみたので, 研究報告とする。

この変形 Deformation は奇形とは似て非なるもので, 出生直後の児に認められるものであり, Congenital Postural Deformity とも称されている。

まず, Deformation の概念を述べると, 諸器官が正常に出来上ってから, 即ち胎生後期に子宮内における強制姿勢により胎児に生じた外表の形態異常であり, 出生直後の児に認められる。従って, 奇形と一見みちがえることもあるが, 全く別個のものであり, その予後は良好であり, 数ヶ月の放置で自然に正常に復する。すなわち, 出産を契機に子宮という鑄型内での強制姿勢や異常な圧力から解放されるので, 自然に回復してくる。図 1 はその成因を図示した。

そこで我々は実際に新生児を対象として, Deformation を観察してみた。